

拓殖大学創立一一〇周年に寄せて

拓殖大学とはいかなる存在か ——百年史を編んで——

拓殖大学学長 渡辺 利夫

明治の日本を一言でいいあらわす用語は「不羈独立」であろう。「不羈」とは、「自由奔放で束縛を受けない」の意である。他国の干渉や介入による束縛を許さず、みずからの方針はみずからの意思で決定して独り立つ。自立的な国家の建設を求め飽くなく努めた時代が明治であり、日清・日露戦争は自立を掌中にするための戦争であった。

開国・維新が日本の近現代史にとっていかに画期的なものであったとはいえ、往時の帝国主義列強にとっては、極東の小国に生じた些末な政治変動の一つに過ぎなかった。実際、幕末に日本が欧米列強と結んだ条約は、治外法権が相手国だけに認められ、関税自主権をも与えられない片務的で不平等なものであった。強者による弱者の支配が当然視されていた時代の産物であり、不平等を平等なものに変じるにはみずからが強者になるより他に方途はなかったのである。

イギリスが日本における治外法権を撤廃したのは日清戦

争の直前であり、アメリカを初めとする列強の治外法権撤廃は日清戦争の勝利によって日本の実力が認められて以降のことであった。関税自主権の回復は明治四四年まで待たなければならなかった。列強との不平等条約の改正に日本は明治の全期間を要したのである。大日本帝国憲法を制定し、帝国議會を召集して近代立憲国家システムの成立を急いだのも、日本人の誇りを傷つける不平等に甘んじているわけにはいかないという明治人の気概のゆえであった。

「不羈独立」を求め近代国家の建設をめざして駆け抜けたこの時代にあつては、国家の興隆と国民一人ひとりの人生との間にはほとんど矛盾というものがなかった。『拓殖大学百年史——明治編』（大正編とともに既刊）の編纂、執筆を通じて私が思い知らされたのは、拓殖大学が明治の時代精神とともにあつたという事実であつた。拓殖大学の卒業生は、明治日本の国勢の伸張とともに、台湾、朝鮮、満州の各地に赴き、多くの場合、それぞれの地域の中央では

なく地方の草の根に入り込み、地方の開発のためひたすらに労苦を重ねた。しかし、その労苦は彼らの青春の歓喜と裏腹のものとして抱えもたれていたことを、私は卒業生が各地方から頻繁に大学に送信してきた同窓会便りから知ることができた。便りの多くは紛れもない名文である。

国家と個人が労苦と歓喜をとともに共有できたこの時代を私は恋慕する。明治の時代を記した文献は山のようにあるが、拓殖大学という一つの組織の消長を通じて明治という躍動的な時代を学ぶことができた幸福は、私には他に代え難いものであった。

拓殖大学は明治三三年六月に設立された台湾協会学校を淵源とする。同学校は明治三七年二月に、前年に公布された専門学校令にもとづき台湾協会専門学校と改称された。台湾統治はその初期においては困難をきわめ、台湾売却が政界の議論の対象となったほどであった。しかし、陸軍中将児玉源太郎を第四代の台湾総督、総督を補佐する台湾総督府民生局長（後に民生長官）として後藤新平が着任した頃から開発は軌道に乗り始めた。

台湾開発が順調に進む一方、日本を取り巻く極東アジアの政治情勢は急変を始めた。焦点はロシアの南下政策であった。ロシアが狙う朝鮮ならびに満州において日本が特殊権

益を確保しなければ、みずからの生存自体が危ういとする日本人の対外危機意識と民族的自覚はいよいよ強いものとなった。日本人が活躍すべき舞台も台湾から朝鮮、清国へと広がっていった。ロシアへの宣戦布告が出され、日露戦争が火蓋を切って落とされたのが明治三七年二月一日であった。日露戦争と拓殖大学との関連について特筆すべきは、卒業生ならびに在学生の総計九六名が陸海軍通訳として各地の戦線に従軍したことであった。

極東アジア政治状況のかかる変転にに応じて、台湾協会も明治四〇年二月には東洋協会と改称され、これにともなって台湾協会専門学校も東洋協会専門学校へと改変された。明治四三年の卒業生を任地別にみると、朝鮮二〇九名、清国七六名、台湾七二名、欧米一名、内地七四名、その他九七名であった。朝鮮、清国が急増し、台湾のポジションが下がり、日本の対外活動の舞台の変転が明瞭に反映されている。拓殖大学こそは明治のあの時代において、アジアの開発に渾身の力をこめ、そのための人材養成に尽力した他に類例のない教育・研究機関であった。この事實は、拓殖大学の生々流転が明治の時代精神とともにあり、明治という時代背景を語らずして拓殖大学を語ることはできないことを意味している。